

パレスチナの人道状況が悪化の一途をたどっており(執筆時点)、ジェノサイドと言われることもあります。かつてジェノサイドの被害に遭った側が、ジェノサイドと形容される側になっていくというのは、外傷性の問題の難しさを物語っているようです。凄惨な映像も流れてきており、接触には注意を要しますが、見ないで済ますこともまた、未来における連鎖を準備します。

被害から加害への連鎖

心的外傷の難しさの一つは、被害者に対する十分なケアがなされないと、いずれ被害者が加害者になってしまうことがあるということです。虐待を受けていた人が虐待してしまうというように、一人の人生の中での連鎖もあります。祖父母世代が受けた戦争被害がタブー扱いになり、被害への漠然とした恐怖が暗黙裡に受け継がれる中で、孫世代が排外主義に傾倒するといった世代間の連鎖も起こりえます。

ケアの第一歩は、被害の事実が周囲から認定されることです。逆に被害の事実を否認されたり拒絶されたりすると、被害体験そのものと同様の外傷となりえるだけでなく、被害体験に触れられなくなり、上記のような未来における連鎖を準備します。

パレスチナからのニュース映像には凄惨なものもあり、閲覧には注意が必要です。しかし、起きていることの意味を全く考えないというのも、外傷がいかに連鎖するかという問題に無自覚になってしまいかねません。



被害の自覚から加害の自覚へ

そう言われても、やはり対岸の火事だと思われるでしょうか。では此岸のことを考えてみましょう。日本人の戦争体験は被害者意識が強く、アジア諸国への加害性を十分に認識できていないという批判があります。しかし実のところ、日本人は被害体験すら十分に認識できていないのではないのでしょうか。それは、「体育会系」という名で軍隊式教育が堂々と生き残っていることにも現れているようです。今でも「体育会系のノリ」に耐えられる人は、「強い」「有能」と評価されたりする風潮があります。「耐え難きを耐え」させられた苦しみを忘れてしまったのでしょうか。受けた被害の認識は、同じことを他者に強いる加害性も、自ずと自覚させます。被害を忘れるための加害という連鎖よりも、誰もが共存できる未来を描きたいものです。

